宇都宮市教育センター **かすたネット通信** 第３１号
令和5年9月20日発行
発行者　所長　金子　渉

困った行動の理由（わけ）を読み解く

標的とする困った行動と直前・直後の出来事の記録がある程度蓄積されたら、相互の関係を検討します。ただ，皆さんの中にはこうした作業に違和感をもつ人もいるかと思います。

「困った行動の原因は家庭にある。親の養育に問題があるから子どもが満たされず，問題行動となって表れているのだ。」「困った行動は発達障害によるもの。だから服薬が優先だ。」

確かにそうした子もいますが，しかしそれが全てだとしたら，学校としてできることは何もないことになってしまいます。果たしてそうでしょうか？

ではまず，直後の出来事との関係について，例を挙げて考えます。
授業中に離席が目立つＡさん。「立ち上がり，鼻歌を歌いながら教室内を歩き回る。」という行動の直後の出来事として，「Ｂ先生が，『Ａさん，勝手に出歩いてはいけません。席に戻ります。』と声をかける。」が多かったとします（類似の対応も含む）。

もし，この離席行動が徐々にエスカレートしていたり，頻繁に起こる状態が続いていたりするとしたら，**直後の出来事すなわちＢ先生の注意は，Ａさんの行動を強化している（強化子となっている）可能性が高い**と考えられます。

Ａさんにとって Ｂ先生からの注意は，いつものお決まりで意に介するものではなく，むしろ容認を意味する台詞となっているか，あるいは，先生の注意を引くことに成功し，してやったりの嬉しい気分なのか，はたまた…。いくつかの仮説を立てて絞り込んでいきます。いずれにせよ，**不適切な行動を維持・助長している可能性がある対応は，修正が必要**です。

> 行動直後の対応が，かえってその行動を強化してしまっているケースは，校内ではよく見られます。第９号「リセット中はチヤホヤしないで」の内容が代表例です。また，第１５号「教室マルトリートメントって何？」で取り上げた毒語の数々は，不適切な言動を一時的に減少させる（**弱化・弱化子**と言います）かも知れませんが，学ぶ意欲や教師への信頼感，自尊感情，学校生活へのモチベーションまでも低下させてしまう危険性があります。

次に，直前の出来事についてです。標的となる行動が現れたときに，その直前の出来事を記録するのは難しいものですが，その行動が起こる「きっかけ」となっているのが直前の出来事ですので，できるだけ多くのデータを収集します。

例えば，「Ｂ先生が皆に説明を続けている。」「自由帳に絵を描くのをやめた。」「授業が始まって１０分経った。」「皆が黙ってノートを書いている。」「Ｃさんがおしゃべりして先生に注意された。」「脚をばたつかせて，プリントを丸めた。」というように，場面・状況や対象児の様子など事実をありのままに書き留めます。

収集したデータを持ち寄り，**「もしかすると，こういうときに離席する（標的とする行動が現れる）のかも…」**といった共通項を見いだすことができれば，不適切行動を抑える手がかりが得られる可能性があります。検討作業は，少なくとも数名のチームで行います。

次号は，支援の方法に話を進めます。

担当　学校生活適応支援アドバイザー（飯山･大瀧）
TEL　639－4392